

パネルディスカッション1 第5回大会企画パネル  
「子どもの日本語教育における教材とICTの可能性」

内容と言語を統合する学び

—教材との関連から—

奥野 由紀子（東京都立大学）

1. 内容と言語と統合する学び

内容と言語を統合して学ぶという考えは決して新しい考え方ではありませんが、実際の教育現場では、どのように内容を与えながら目標言語を習得させるのか、その具体的な方法は依然、非常に難しい課題です。言語教育の中で具現化され、注目されたのは1970年代の英語とフランス語を公用語とするカナダのモントリオールにおけるイマージョン教育でしょう。そして、1980年代のアメリカで外国語教授法としての「内容中心指導法」CBI（Content-Based Instruction）として体系化され、学校という社会的文化的な学習文脈に埋め込まれた中で、ことばを運用する経験を通してこそ身につくという考えのもと、様々なプログラムが作られ、これまでにJSLの子どもの教育・支援現場でも多く取り入れられてきています（齋藤、2019）。またヨーロッパでも1990年代に、EUの統合のもと、「ヨーロッパ言語共通参照枠」CEFR（Common European Framework of Reference）の普及と共に、言語を通して平和な社会の実現に必要な汎用的能力を育成するために「内容言語統合型学習」CLIL（Content and Language Integrated Learning）が生まれ、ヨーロッパのみならず、様々な国や地域で、子どもから成人まで数多くの実践が蓄積されつつあります（小林・奥野、2019；笹島・山野他、2019）。

2. 内容と言語を統合する授業や教材を設計する上で有効な概念4C

CLILでは、内容(Content)、言語(Communication)、思考(Cognition)、協学(Community)という4つの概念（以下4C）を意識してコースや授業、教材等が設計されます。

**Content（内容）**：教科科目の内容や、学習者のニーズや興味、関心に合わせ、知的好奇心を刺激し、汎用的能力の育成を意識して選ばれるトピックやテーマのことで、テーマに関する基礎知識の理解（「宣言的知識」）からその知識の実生活への応用（「手続き的知識」）の獲得を意識する必要があります。

**Communication（言語）**：以下①～③の「3つの言語」について、相補的に各言語的側面の習得が促進されるよう活動を考えます。①language of learning（学習の言語：テーマに関する重要語彙、表現、文法等）、②language for learning（学習のための言語：資料収集方法、作文の書き方、議論の仕方等の学習スキル）、③language through learning（学習を通しての言語：4技能を活用し習得を促進させる方法、情報のインプット→グループワーク→発表→ディスカッション→作文・レポート等）。

**Cognition（思考）**：記憶→理解→応用→分析→評価→創造という、低次元思考 LOTS（Lower-Order Thinking Skills）から高次元思考 HOTS（Higher-Order Thinking Skills）へと思考力を伸ばすことを意識して授業準備、実施、評価を行います。LOTSもHOTSもどちらも重要な思考力です。教師は思考力の段階を意識することで、学習者の認知的負荷

をも意識することができます。

**Community (協学/異文化理解)**：異なる意見を共有し共に学ぶという教育観に根差し、ペアワークやグループワークによる協学を積極的に用います。また、ペアやグループから、教室、学校、地域、母文化社会、学習言語社会、地球市民という自分が属するより広い構成員として考えながら、協働力を育み、相互文化理解を促進させていきます。

この4つのCをフレームワークとし、教育現場の実状や、学習者の年齢、言語レベル等に合わせ、教科科目等の内容学習を中心とした授業（ハード CLIL）から言語学習を中心とする授業（ソフト CLIL）まで、多様で柔軟なコースデザインが可能とされます（奥野他、2018）。

### 3. 内容と言語を統合する学びと教材

「内容＋言語」の教育では、真正性の高い素材を使用したインプットを与えることが重視され、音声、紙媒体、映像、実物、写真、絵など様々な媒体を活用し、豊富なインプットを与えることで、言語的にも内容的にも理解を深めていくため、いわゆる「教材」は多くはありませんが、内容と言語を統合する学びのスキヤフォールディング（scaffolding；足場かけ）<sup>1)</sup>の一つと捉えられています。内容は学年や年齢が高くなるほど認知的に難しく、抽象的になりますが、学習者の目標言語レベルが低い場合、扱う内容の認知レベルとの間にギャップが生まれます。そのため認知レベルと目標言語レベルのバランスをどのように取るのかが課題となってきます。そのギャップを埋めるために、教材やテキストは、学習者に応じて補助教材を足したり、リライトして用いることが多く、学習者が持っている母語、背景知識、絵画的な能力、テクノロジーなどのスキルも状況に応じて相互補完的に活用されます<sup>2)</sup>。また、シラバスの作成、教材の作成、各授業においても4つのCを軸に活動が考えられます。当日は小学校での CLIL 実践例（笹島他、2019）や、開発した日本語の CLIL 教材（奥野他、2021）も時間の許す限りご紹介できればと思います。

注)

1) スキヤフォールディングとは、学習者が独力では達成できない課題であっても、他者や教材の助けを借り、また協働で課題を遂行することによっていずれ自力でできるようになるための一時的な支援のこと。

2) 複リテラシー・アプローチ（小林・奥野、2019：35）

#### 【引用文献】

奥野由紀子・小林明子・元田静・渡部倫子（2018）奥野由紀子（編）『日本語教師のための CLIL 入門』凡人社

奥野由紀子・小林明子・元田静・渡部倫子（2018）奥野由紀子（編）『日本語×世界の課題を学ぶ 日本語で PEACE』, 凡人社

小林明子・奥野由紀子（2019）「内容言語統合型学習（CLIL）の実践と効果—日本語教育への導入と課題—」『第二言語としての日本語の習得研究』第22号、pp.29-43.

齋藤ひろみ「JSL の子どもを対象とする内容重視の日本語教育—日本国内の実践・研究の動向から—」『第二言語としての日本語の習得研究』第22号、pp.10-27.

笹島茂・山野有紀（編）（2019）『小学校外国語教育の CLIL 実践』三修社